

地道な取り組みで”安定経営”をめざして ～ロケットの町で漁業に取り組んで～

南種子町漁業協同組合 長田 昭二郎

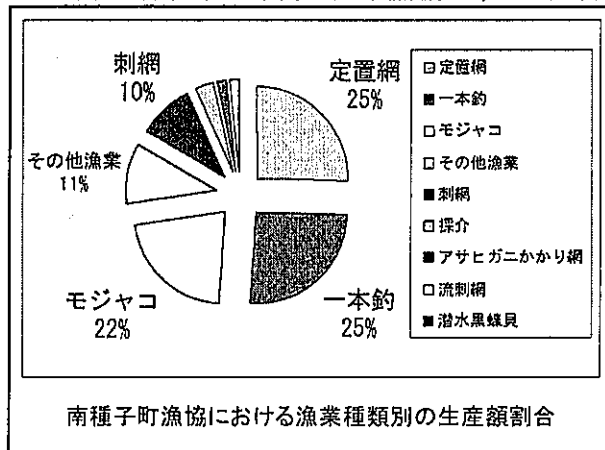
1 地域の概要

南種子町は、種子島の南端に位置し、東・西・南の三方を広大な海に囲まれている。沖合には黒潮が流れるなど、豊かな海に囲まれた地域であり、漁業経営を営むためには恵まれた場所である。

1543年、ポルトガル船が町最南端の門倉岬に漂着し、鉄砲伝来の地となった歴史的な土地でもあるが、一方で、現在は、日本唯一の大型ロケット発射場である、種子島宇宙センターがあるため、宇宙に最も近い町であり、歴史と未来が共存する町である。

2 漁業の概要

私の所属する南種子町漁協は、正組合員64名、准組合員154名の合計218名が所属している。



る。

漁業種類としてはアオダイやヒメダイ、カンパチ等を対象とする瀬物一本釣、メダイやマダイを対象とするかかり釣り漁業、ニザダイ、イシダイ、ブダイ等を対象とする刺網漁業、メアジ、ブリ類等を対象とする定置網漁業、トビウオを対象とするロープびき及び大トビを対象とするトビウオ流網漁業、アサヒガニを対象とするアサヒガニかかり網漁業、素潜りによるトコブシ採貝漁業、モジャコ漁等がある。珍しい漁

法としては、トビウオを延縄で漁獲する浮延縄というものもある。漁協の生産額は、近年、1億5千万円～2億3千万円で推移している。

3 実践活動課題選定の動機

私は、昭和51年に門司海員学校を卒業して、海運会社の貨物船乗組員として就職していたが、昭和53年にUターンして漁業に就業し、当初は父親の船に乗り、刺網漁業等に従事しながら、漁業技術を学んだ。

昭和61年に漁船を購入して独立し、刺網漁業を主体とする漁業経営を開始した。その後、新たな漁業種類の導入や、漁ろう作業の省力化などを自分なりに進め、現在は、瀬物一本釣漁業を主体とした組み合わせ漁業の経営形態となっている。

今回は、安定した漁業経営をめざして、組み合わせ漁業などの地道な取り組みを実践してきたこと等について、これまでの漁業経営を振り返るとともに、今後の取り組みについて検討した。

4 実践活動の状況

(1) 漁具漁法の導入

南種子地区は刺網漁業が主体の地域であり、私も独立してしばらくは、沿岸での刺網漁業を主体としていた。しかし、沿岸での水揚げが減少して、厳しい経営状況となってきたため、15年ほど前に中種子地区の友人から瀬物一本釣を教わり導入した。その後、地域内の方にも伝え、現在では瀬物一本釣が主体となった船が6隻以上になっている。

この瀬物一本釣漁業の導入は、当時、沿岸の漁場を主としていた私や地域内の方にとって、漁業経営上、大きな転機であった。

瀬物一本釣の導入後、しばらくは、一般的に使われている動力式釣機を用いていたが、常に幹糸を手で持ってあたりを取る必要があることや、釣機2台を一人で使いこなすににくい面があったため、改善することを検討した。

当時、アンカーをおろしてメダイやマダイ等の一本釣を行う「かかり釣り」を実施していたが、竿と電動リールを用いるので、釣機よりも体力的に楽で、一人でも竿を2本使いこなすことが出来るものであったため、竿と電動リールを用いるこの方法を瀬物一本釣に導入してみた。

電動リールはドラグ調整が釣機より細かく設定できるうえに、巻き上げ速度も変えられるため、針掛かりした魚がバレにくくなった。また、初めに食いついた魚の引き込みによって自動的に追い食いしやすい状態を作り出すようなドラグ設定を見つけだすことが出来た。さらに、リールから繰り出した幹糸の長さが表示されるので、仕掛けを底から浮かせて釣るメダイやウメイロ釣りなどの場合には、魚探反応のある水深で仕掛けを停止させることができるようになり、これらによって漁獲効率を向上させることができた。

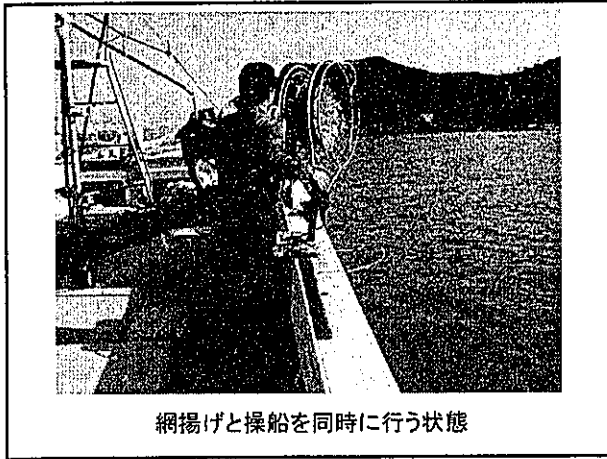
ハマダイ(チビキ)は釣機の方が適しているが、食いが良ければ、この方法でも通用する。また、ムツ釣りなど水深300メートル以上の深海釣りも可能であり、体力的にもかなり楽で、利点が多い方法である。現在では、この方法を地域内の一本釣漁船も導入しており、従来の釣機に比べ、省力化や操業効率の向上が図られたと感じている。

最近では、屋久島地区から西之表地区に導入されて良い成績をあげていた、丈の高い大トビの流網を私も導入し、従来の網とともに使い始めたところである。現在までのところ、混獲される松イカが、従来の網より多くかかるようになるなど、違いがみられ、2月から始まる大トビに期待しているところである。

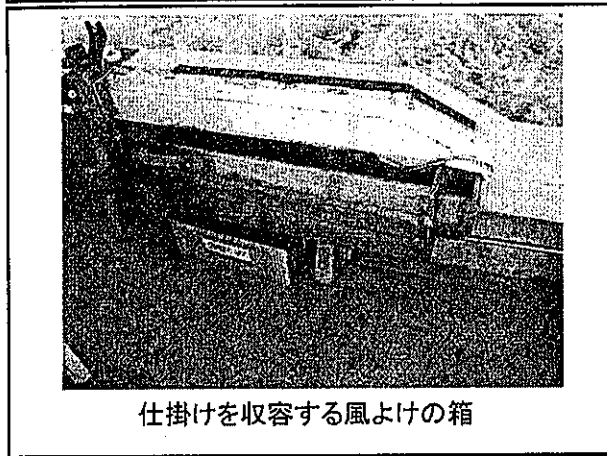
(2) 操船作業・漁ろう作業の省力化

カジキ流網や大トビ流網といった網漁業においては、操船しながら網を扱う作業も行うため、操業時に2人は必要であった。しかし、瀬物一本釣の導入によって、一人での操業形態となり、また、漁獲不振に加え魚価が低迷した状況では、2名分の労賃を出すことは経営上厳しいため、一人で操船しながら操業する方法を検討した。

一人で操業するためにエンジンリモコンを導入し、作業がしやすいようなコントローラーの設置位置を検討した。さらに、網を揚げる時にコントローラー等に網が引っかかるのを防ぐためのガードを自作するなどの工夫を行った。その結果、一人での操業が可能とな



網揚げと操船を同時に行う状態



仕掛けを収容する風よけの箱

り、省力化による経費削減も可能となった。現在では、同じ方法により地域内でも一人で操業する方が出てきている。

一本釣漁業においては、私が操業する漁場は、年間を通じて風の強い日が多く、風によって船上に揚げた仕掛けがからんでしまうことがある。この対策として、地域内の方が仕掛けを入れておく風よけの木製の箱を考案したので、私も導入し、設置している。魚の食いがたった時に風で仕掛けがからむと、ほどくのに時間がかかって貴重な漁獲の機会を逃してしまい、操業効率が低下してしまうが、風よけの箱を使うと風があっても仕掛けがからまらず、また、足で仕掛けを踏むこともないのでハリスも傷つかない。この工夫も、現在では他の一本釣船にも広まっている。簡易な工夫ではあるが、風のない日でも使い勝手が良く、重宝している。

これらの漁具漁法の導入や作業の省力化等は、私たちの地域以外では既にあったものか

もしれないし、劇的に改善されたというものではないかもしれない。しかし、他地区や地域内の同僚から教わった方法等を積極的に導入し、自分なりに改良するなどした結果、省力化や操業効率の向上につながったものであり、このような取り組みを継続することが、漁業経営上、価値があり、重要である、と実感している。

(3) 組み合わせ漁業の実践

漁業に就業した頃の刺網漁業主体の時期から、現在の一本釣漁業主体の漁業形態となるまでに、キビナゴ流網やアサヒガニかかり網など、様々な漁業種類を経験してきた。資源状態や採算性等の状況に応じて漁業種類を変えて行き、現在の漁業形態となった。現在のおおよその年間操業スケジュールとしては、年始めのメダイ夜釣りに始まり、大トビ流網、

年間の操業スケジュール

漁業種類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
メダイ夜釣り	←→											
キビナゴ流網	←→											
モロコシ				↑								
建網					←→							
瀬物一本釣					←→							
カサガリ									←→			
メダイかかり											←→	

モジヤコ漁、建網、瀬物一本釣、カサガリ流網、メダイかかり釣りと7種類の漁業を組み合わせる形に落ち着いている。もちろん、その時その時の状況に応じて臨機応変に漁業種類や対象魚を変えながら操業する形をとっている。

このような組み合わせ漁業を実践するに至ったのは、好漁を狙って、ひとつの漁業種類や漁場にこだわってはいない、漁獲不振、経営不振を招くと考え、大きな収入にはならなくても地道に稼ぐことのできる漁業を組み合わせ、時期や状況に応じ

た魚種を確実に漁獲して、安定した経営を続けていくことが重要であると考えているためである。

沿岸の小型漁船による一本釣は零細で、経営規模が小さい。しかし、数人が乗り組む沖合の一本釣など、比較的大きな規模の経営体とは異なり、規模が小さいがために、状況に応じて漁業種類を変えられるなど、小回りが効くという小型漁船のメリットがあるため、これを活かすべきであると考えている。

また、組み合わせ漁業を実施することで、漁獲対象魚種の片寄りを分散させられるため、資源管理にも貢献すると考えている。

(4) グループ活動等

漁村地域で漁業を営むにあたって重要な事項のひとつにグループ活動がある。

現在、私も青年部の一員として、海岸清掃や先進地視察等の活動に参加しているほか、婦人部と協力して、町の文化祭や漁協主催の水産祭り等のイベント時に、水産物販売による魚食普及活動も行っている。

また、青年部活動のほか、地域内では漁協監事、トビ流網生産協議会長、モジャコ生産者協議会長、県域では資源管理底魚一本釣協議会副会長を努めさせてもらっている。漁を休み、時間を割いて会議等に出席するのは大変ではあるが、いろいろな情報や考え方が入手できたり、他地域との交流を持つことができるということは、安定した漁業経営をめざすうえで、良い勉強になっていると感じている。

今後も、自分のできる範囲でお役に立てるのであれば、グループ活動や各種協議会等に参加・協力していきたいと考えている。

5 今後の取り組みについて

現在の地域における漁業経営の現状は、資源の減少や魚価の低迷、後継者不足、販路拡大など、多くの問題点を抱えており、決して良い状況ではない。これらの対策として、自分なりに取り組んでいきたいと考えていることは、以下のとおりである。

(1) 魚価対策

魚価対策の一つに販路拡大がある。これまでも漁協が瀬物類を他県へ出荷するなどして取り組んできたが、離島ということもあり輸送コストの問題等で長くは成り立たなかった。地域内での消費は人口が少ないために多くは望めず、島内消費以外は鹿児島市場への出荷がほとんどである。今後は、鮮度保持技術の向上や輸送方法の改善による販路拡大に取り組んでいく必要があると考えている。

(2) 後継者・高齢化対策

後継者対策としては、個人的なことであるが、私の息子が漁業への就業を決意しているので、自分が持っている技術については、息子に伝えたいと考えている。

また、他の若手漁業者にも教えられることがあれば協力し、自分がわからないことは教えてもらうなど、漁業者同士で協力していく体制をつくるのが、自分および地域で取り

組める後継者対策であると考えている。

なお、私の住む地区に、県の事業で「ザ・漁師塾」という3ヶ月間の長期漁業研修で、若い方が来ているが、後継者の確保は必要なことなので、私にもできることがあれば、研修に協力したいと思っている。

高齢化対策について、自分のことを考えた場合、自分の体力に応じた漁船に乗り換え、近い漁場で操業できる漁業種類を続けていきたいと思っている。電動リールの活用など、操船作業・漁ろう作業の省力化をこれからも地道に進めていくことが、結果的に、高齢化対策にもなると考えている。

(3) 今後の組み合わせ漁業

今後の漁業経営については、これまでと同様に状況やコスト等を考え、また、新たな漁具漁法を導入しながら、組み合わせ漁業を継続したいと考えている。

今後、導入を検討しているのは、熊毛地区の他の漁協の方達が時期的に比較的安定した漁獲を上げているサバフグの一本釣である。一人では効率が悪かったため、今後は就業する予定の息子と二人で取り組んでみたいと考えている。



他には、カツオ一本釣漁業の導入も考えている。屋久島近海に春カツオの好漁場があるが、屋久島や種子島地区の地元船は全く利用していない。県漁連や水産試験場からは、小型船によるカツオ一本釣の導入と鹿児島市場への一元出荷を勧められている。これを受け、熊毛地区の行政や漁協で組織する熊毛地区水産振興会でも、カツオ一本釣漁業の導入に取り組んでいるところであり、私も、昨年11月下旬に奄美大島の瀬戸内町に、カツオ一本釣の乗船研修に行

き、ご指導をいただいたところである。この漁業を導入するには、漁船の改造や生き餌の確保等の課題もあるが、地元の漁業者同士で知恵を出し合い、工夫をしながら沿岸資源の活用を図っていきたいと考えている。

漁業経営は厳しい状況にあるが、頑張っただけの見返りが期待でき、面白みがある。効率の良い組み合わせ漁業を地道に続ければ、まだまだ漁業も捨てたものではない、と考えている。まだ利用していない漁場や資源、さらなる省力化の工夫等もあるはずであり、今後も、新たな漁具漁法の導入や作業の省力化に地道に取り組みながら、組み合わせ漁業を実践し、安定経営をめざしたいと考えている。